

5. まちづくりの基本方針

5-1 まちづくりの視点

前述で示した木津北・東地区の位置づけ・特性・検討経緯・社会動向等を踏まえ、今後のまちづくりに向けた視点を整理する。

木津北・東地区の概要と位置づけを踏まえた、まちづくりの視点

- ・木津北・東地区が有する自然環境(まとまった緑や多様な自然環境)や特徴(山・川・平地の接点、自然と人の生活環境の接点等)、ポテンシャル(大阪層群、貴重種、文化・歴史等)を踏まえた、まちづくりが必要である。
- ・関西文化学術研究都市サード・ステージ・プランの実現に向けた具体的な取り組みが必要である。
- ・全国に先駆けて、人文・社会科学と自然科学分野の総力を結集して、身近な自然の保全と継承を進めることで、環境負荷を低減した生活環境づくりによる持続可能社会のための科学に取り組む必要がある。
- ・未来を拓く新文化首都として、地球規模での環境に関する研究や自然・人文・社会科学等が融合した文化学術研究と時代を先取りして多様な試みを行うパイロットモデル都市を目指す必要がある。
- ・知の創造都市の形成に向け、市民や研究者の知的生産、文化活動による新しい価値の創出、持続可能社会での多様なライフスタイル等が創造・発信されるまちづくりが必要である。
- ・関西文化学術研究都市の建設に関する基本方針や関西文化学術研究都市(京都府域)の建設に関する計画等の関連計画と整合するまちづくりが必要である。
- ・旧木津町では「まちと自然、産業、地域と社会、ひと」が相互連携する都市特性を活かし、地域資源の活用・保全、豊かな自然環境と新たな市街地との共存、産業(農業等)の促進等、身近な自然の保全と継承、環境負荷を低減する生活環境づくりによる「環境と共生する安全で安心なまちづくり」等を進める必要がある。
- ・環境と共生する安全で安心なまちづくりの検討が必要である。

木津北・東地区の特性を踏まえた、まちづくりの視点

- ・木津北地区の地形や地質的な特性(急峻な地形、硬い花崗岩の岩盤、地質的な価値が高い湧水湿地を形成しやすい大阪層群等)、オオタカ・カスミサンショウウオ等の貴重種の生息環境や生物多様性の保全を踏まえたまちづくりが必要である。
- ・室町、戦国期の大和・山城地区の歴史・文化を考えるうえで極めて重要で、規模、構造ともに近畿有数の山城跡(鹿背山城跡)など歴史的資源、里山文化(鹿背山焼き、鹿背山柿)を活かしたまちづくりが必要である。
- ・木津川アート、鹿背山倶楽部、鹿背山元氣プロジェクト、鹿背山柿を育てるネットワーク(産業)等の地域資源(里山・景観・文化等)を活用する多様な主体との連携が必要である。
- ・地すべり等の自然災害の抑制、水源涵養林としての機能等、里山が永年にわたり担ってきた役割を踏まえたまちづくりが必要である。
- ・木津北地区が有する多様な自然環境や歴史・文化等を都市部の住民が身近にふれあうことのできる場、持続可能社会のための科学を实践する場、周辺の人口集積地へ生態系サービスを提供できる重要なフィールドとしての機能を踏まえたまちづくりが必要である。

- ・まち、自然、社会(歴史・文化・産業)、生活(ひとの営み)が相互連携した持続可能な都市の創造に向けたまちづくりが必要である。
- ・学研都市における生物多様性の保全、国内外から注目される里山の再生や資源的価値の創出、里山活動に伴う発生材・副産物等の安定供給による産業振興(資源活用)等の可能性等を踏まえたまちづくりが必要である。
- ・全体的になだらかな地形で、農地(耕作地)として広く活用されるほか、礫層の大阪層群の特徴を活かした梅谷大根の栽培等により形成されている木津東地区の田園環境を活かしたまちづくりが必要である。
- ・新たな交流活動の展開や多様なライフスタイルやニーズへの対応が可能な環境を有している木津北地区のポテンシャルを活かしたまちづくりが必要である。

木津北・東地区におけるこれまでの検討経過を踏まえた、まちづくりの視点

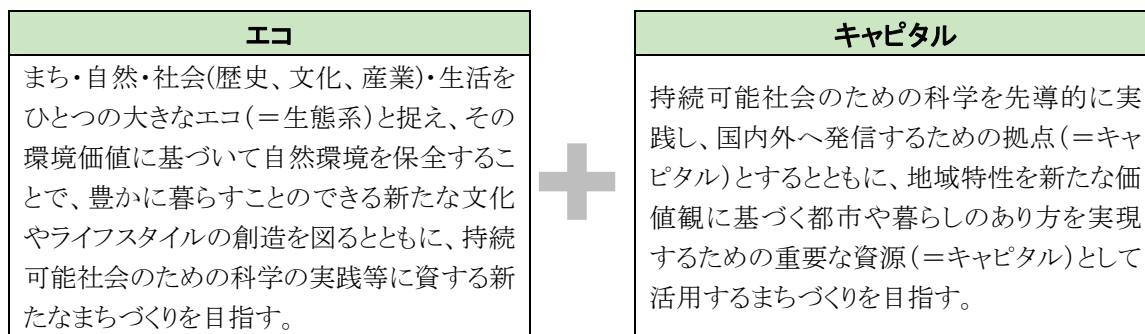
- ・木津北・東地区においてUR都市機構による事業中止が決定された。
- ・持続可能社会の実現に貢献する研究・開発の実践、オオタカをシンボルとする生物多様性の保全を目的とした、里山環境の再生、自然と人間のかかわりをベースとする環境価値の創造の実現に向けたまちづくりが必要である。
- ・地域資源と高度な研究活動が融和する、持続可能な社会の実現に資する実証・実験フィールドの形成、多様な主体の参画と連携・ネットワークによる重層的な活動の展開、活動成果の活用と地域交流の促進による新たな文化・ライフスタイルの創造・発信に向けたまちづくりが必要である。

木津北・東地区を取り巻く最近の社会動向を踏まえた、まちづくりの視点

- ・COP10 で合意した 2020 年戦略目標(生物多様性への直接的圧力を減少させ、持続可能な利用を促進)や生物多様性地域連携促進法の公布による生物多様性の保全等、里山の維持再生をめぐる世界的潮流も含めた検討が必要である。
- ・都市部の水源の保全を目的とした自治体の買収、適切な保全整備による安全・安心の確保(地すべり等の災害防止等)、地籍調査の充実(権利と保全の明確化)、民間企業の積極的な森林保全活動への取組み等、里山を取り巻く国内の動向を踏まえた検討が必要である。
- ・これまでの経済性重視のまちづくりから、成熟した社会としての最適化(縮小)とそれによる生活の質(QOL)の向上を目指した取組みが必要である。
- ・循環型社会の形成に向けた熱エネルギーの回収・利用等の資源リサイクルに関する検討とともに、リサイクル研修ステーションを拠点とした環境学習の推進等の継続が必要である。

5-2 まちづくりのコンセプト

地区の位置づけや特性・地域資源・取り巻く状況等の整理に基づく課題及びキーワードから、まちづくりのコンセプトは以下のように設定する。



エコキャピタル構想

- ・木津地区が昔から「まち、自然、社会(歴史・文化・産業)、生活(ひとの営み)」の相互連携や都市と自然との係わり合いの中で形成してきた、生物多様性の保全、農業等の経済活動、文化や歴史の創造、地域の特性、都市部における重要性等を、今後のまちづくりにおいても持続的に維持すべき重要な仕組みと捉え、実現すべき概念として位置づける。
- ・木津川市の全市的な構想へと発展させるべく次に掲げる目標の達成を目指す。

<サード・ステージ・プランの実現>

<身近な自然の保全活用と継承>

<環境負荷を低減する生活環境づくり>

<持続可能社会のための科学の実践>

5-3 基本方針

木津地区を支える都市の特性を勘案し「自然、社会(歴史・文化・産業)、生活、まち」の4つの側面から目指すべき方向性を設定した。

表 エコキャピタル構想の目指すべき方向性

項目		目指すべき方向性
	自然	・貴重種の生息環境や生物多様性を、教育や産業等の資源として保全・活用し、身近な自然との持続的な共生を図る。
	社会 (歴史・文化・産業)	・木津地区の歴史資源や里山文化を再評価し、それを活用した新たな産業を創出する。 ・里山を実証実験や環境学習等のフィールドとして活用し、地域資源を活かしたサービスの提供を図る。
	生活	・農ある暮らしを通じ、多様な主体との連携による農地再生、地産地消や食育を推進する。
	まち	・未利用・再生可能エネルギーを有効に活用することにより、低炭素社会の実現に貢献する。 ・資源リサイクルの推進、環境調和型の研究開発施設等との連携や資源提供による持続可能社会のための科学の実践に貢献する。

目指すべき方向性を踏まえ、まちづくりのテーマとその実現に向けた基本方針や機能を以下のよう

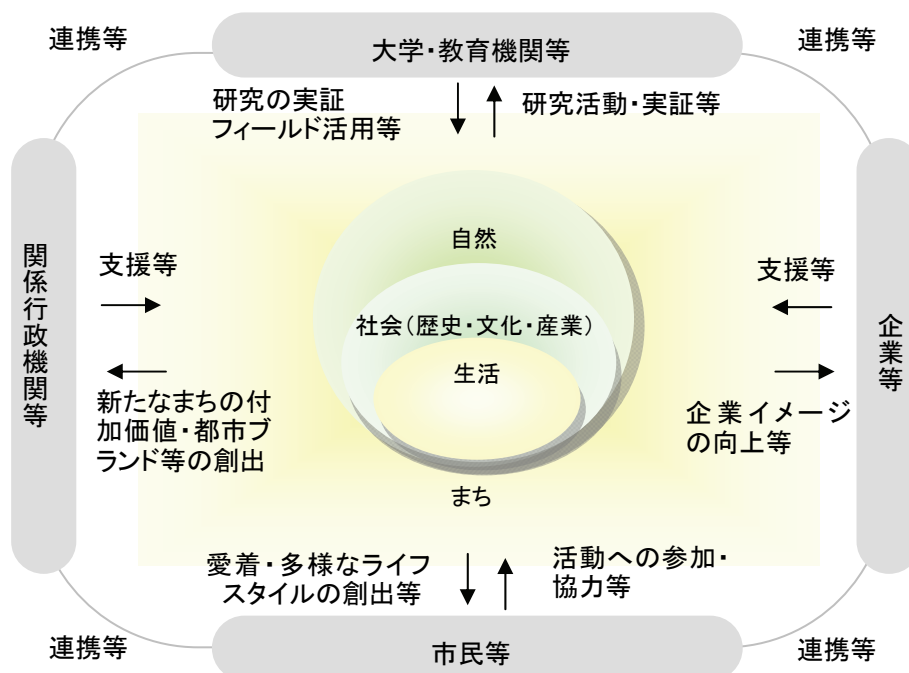
表 基本方針等

テーマ	基本方針	機能
①自然 自然環境の保全・活用によるまちづくり	多様な主体と連携し、自然環境を保全するとともに、自然が持つ多様な機能を楽しむ。	・里山環境の保全・活用 ・田園環境の保全・活用 ・生物多様性の回復・向上
②社会(歴史・文化・産業) 歴史・文化・観光を活かしたまちづくり	より豊かな生活の実現に向けて、地域資源を活かしたサービスを創出する。	・歴史・文化に関わる機能の強化 ・国際化に関わる機能の強化 ・教育・学習機会の創出 ・産学官連携・ネットワークの強化
③生活 農ある暮らしを実現するまちづくり	「農」を通じた多様な社会参加の機会の創出や、食による生活の質の向上を図る。	・食育の推進 ・産学官連携・ネットワークの強化 ・農業と調和した生活環境の創出 ・社会参加の機会の創出
④まち 未利用・再生可能エネルギーを活かした低炭素社会のまちづくり	地区全体としての環境負荷低減を図ることで、低炭素社会の実現を目指す。	・環境調和型研究開発施設の立地促進 ・未利用・再生可能エネルギーの利活用 ・資源リサイクルの推進 ・持続可能社会のための科学の実践

5-4 まちづくりの展開

エコキャピタル構想は市民・行政・企業・大学等の多様な主体がそれぞれ連携しながら展開する。このような多様な主体との相互連携、自然・産業・ひと・まち等がそれぞれ連携しながら地域資源の活用を図り、複合的にまちづくりを進める手法を「持続可能都市・学研木津川モデル」と位置づけることとする。木津地区での展開イメージは以下のとおりである。

図 エコキャピタル構想の展開に向けた概念 ～持続可能都市・学研木津川モデル～

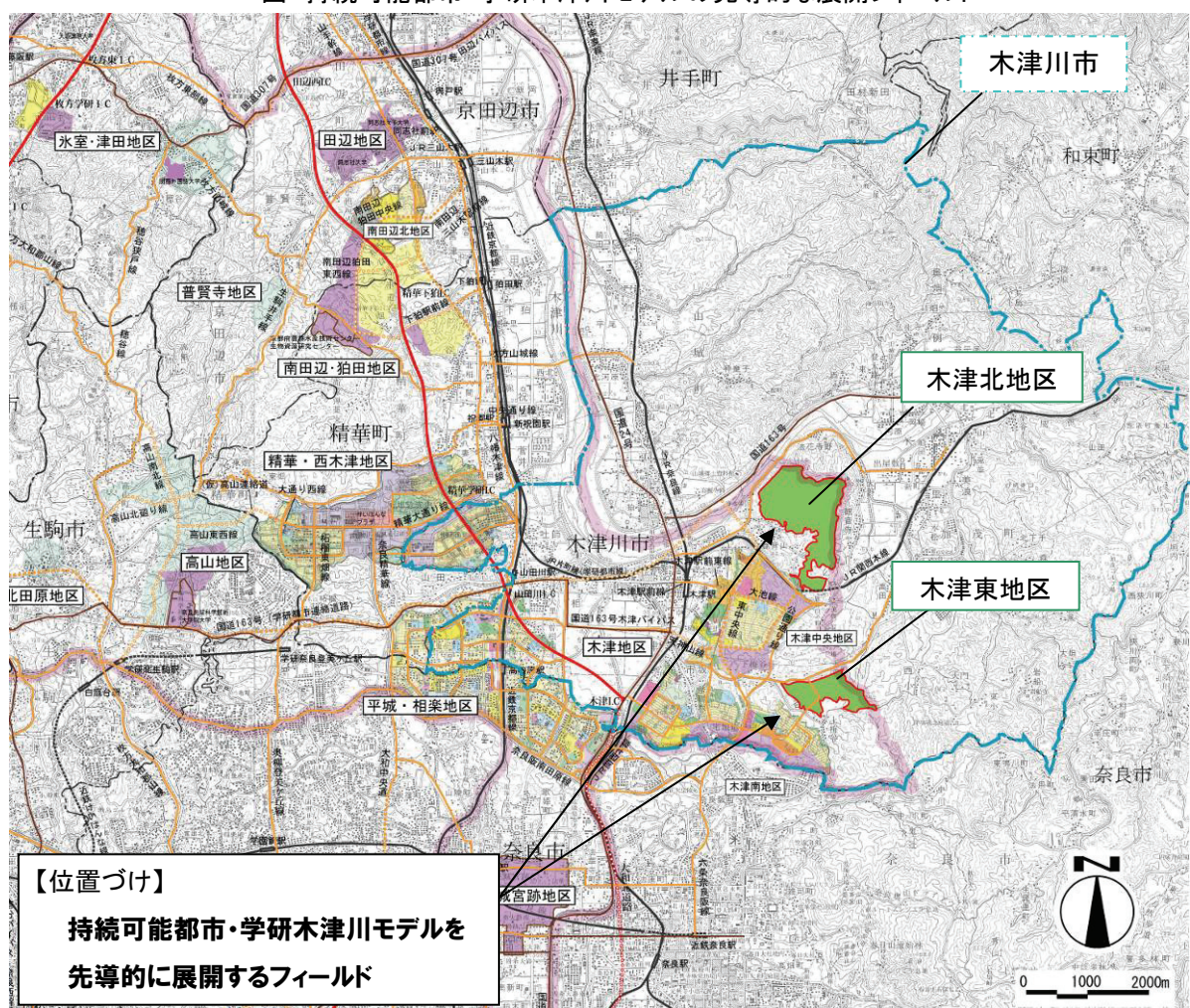


エコキャピタル構想は第一次木津川市総合計画、関西文化学術研究都市サード・ステージ・プラン等の上位・関連計画と整合するものである。

そこで、環境調和型研究開発施設との相互連携、地域特性（里山・歴史的資源、地域産業・農業等）の活用、生物多様性の保全・活用等の実践、成熟社会における新たなまちづくりを先導するため、関西文化学術研究都市の一角に位置づけられる木津北・東地区を持続可能都市・学研木津川モデルの先導的な展開フィールドとして設定し、具体的な活動の推進や多様な主体の参画と活動実施に対する機運を高めることによって、全市的な構想へと発展させていくことを目指す。

また、木津北・東地区での取組みにより実証された新たな仕組み「持続可能都市・学研木津川モデル」を市全域に展開することにより、先駆的な自治体経営を目指す。

図 持続可能都市・学研木津川モデルの先導的な展開フィールド



出典：けいはんな学研都市リーフレットに掲載の図面に加筆